

主体的・対話的で
深い学びを実現！

アクティブ・ラーニング 実践講座

小学6年生・国語



授業者

埼玉県
戸田市立戸田第二小学校
野島英樹 のじま・ひでき

教職歴9年。同校に赴任して4年目。6学年担任。生徒指導主任。アクティブ・ラーニングの実践は3年目。2016年度には、市のアクティブ・ラーニング研究員を担当。

実践校

戸田市立戸田第二小学校

◎1952(昭和27)年開校。市内最大の大規模校。文部科学省、埼玉県、戸田市から様々な研究指定を受け、道徳、学び合い、アクティブ・ラーニングなどを研究。

校長 小高美恵子先生
児童数 989人
学級数 32学級(うち特別支援学級3)
電話 048-442-2675
URL <http://www.toda-c.ed.jp/site/toda2-e/>

発問やICTを活用して、 子どもの「対話」を促し、 課題認識や多様な視点を育む

「主体的・対話的で深い学び」を授業の中で具現化するためには、どのような授業づくりが求められるのか。第1回は、単元導入において、発問を工夫したり、ICT機器を活用したりして、子どもの主体的な取り組みや対話を促した授業づくりを紹介する。

単元計画 6年生・国語「未来がよりよくあるために」(意見文作成)

ねらい 「未来がよりよくあるために」どのようなことをすればよいのか、自分の考えを持ち、他者の立場や意見を意識した説得力のある意見文を作成する。

育みたい資質・能力 批判的思考力(特に、「課題認識」「視点の多様さ」「論理的整合性」)

時数	概要	学習内容・活動
1	テーマ	どんな未来にしていきたいか自分の考えを持とう。
2	決め	意見文のテーマを決めよう。
3	資料収集	自分の考えの根拠となる出来事・資料を、適切な手段を使って集めよう。
4	構成表 作成	論理的な文章の構成を理解し、意見文を書くために構成表を作成しよう。
5		自分の考えについて予想される質問を整理しよう。
6		「予想される反論」と「反論に対する解答」を構成表に追記する。
7	書き方の工夫の理解	説得力のある意見文を書くために、文章の書き方の工夫を知ろう。
8	意見文作成	構成表を基にして、自分の考えが伝わる意見文を書こう。
9		
10	読み合い	お互いの意見文を読み合い、感想を交流し合おう。

今回取り上げる授業 意見文のテーマ決め(2コマ続き)

学習内容(時間配分の予定)	学習の主な目標	活動内容
1 導入(10分)	単元の課題を明確にし、目的意識を持たせる。	先生の説明と、児童のムーブノート*1への書き込み・共有。
2 資料を読む(15分)	課題文の要点をつかむ。	先生の範読と児童の発表・共有。
3 意見を書く(10分)	自分の意見を決める。	児童のムーブノートへの書き込み。
4 討論(20分)	討論の型を学ぶ。他者の意見を聞き、考えを広げる。	先生の説明と児童の発表・共有。
4 5 テーマの分類(25分)	未来について、視野を広げる。	先生の説明と児童のムーブノートへの書き込み・共有。
5 まとめ(10分)	意見文を書くテーマを決める。	児童のムーブノートへの書き込み。

*戸田第二小学校提供資料から抜粋し、編集部で作成。

アドバイザー



戸田市教育委員会
教育政策室
副主幹兼教育センター
担当指導主事
杉森雅之
すぎもり・まさゆき
小学校教諭を経て現職。
専門は算数・数学。



戸田市立戸田第二小学校
校長
小高美恵子
おだか・みえこ
小学校教諭、教頭を経て現職。

*1 ミライシード(*2参照)の機能の1つ。各自がタブレット端末に書き込んだ内容をリアルタイムで共有できたり、学級全員の意見を一覧にして、分類やキーワード抽出により学習状況や理解度を容易に把握できたりする。
*プロフィールは2017年3月時点のものです。

1 未来をイメージ

▶▶▶ 15分



単元の課題と目標を伝えた後、野島先生は意見文のテーマとなる「よりよい未来」を子どもが自分なりに思い描くための導入として、「10年後はどんな未来になっているとよいと思うか」と問いかけた。まずは思いついたことを「○○な未来」という短い文で「ムーブノート」*1に書かせた。「便利な未来」「自然豊かな未来」などの書き込まれた内容を先生が読み上げ、全体で共有した。

2 課題文を読む

▶▶▶ 15分



先生が教科書の「平和のとりでを築く」を範読。子どもには、聞きながら原爆の恐ろしさを感じたところに線を引くよう指示した。次に、線を引いた箇所を発表。挙手を求めるとすぐに手が挙がり、「川は死者で埋まっていた」などの4か所が挙がった。先生は子どもの発言を復唱し、「ここに線を引いた人は？」と尋ねて意見を共有。最後に発表内容をまとめて板書した。

授業づくりの工夫①

「コーディネート発問」で
子どもの思考を広げる

アクティブ・ラーニング（以下、AL）の実践研究に取り組む戸田市では、学校を超えた授業づくりを進めている。今回紹介する授業は、同市立笹目東小学校で行われた授業の単元計画や内容を、戸田第二小学校の野島英樹先生が自校の児童の実態に合わせてアレンジした内容となる。

全10時間の1・2コマ目となる今回の授業で、野島先生が最も大切にしたのは、子どもに単元を通しての目的意識を持たせることだ。野島先生は、2016年夏に受けた市の教員研修で単元導入の重要性を学び、早速、理科の授業で「実験結果を学会で発表しよう」という設定にしたところ、子どもたちの意欲が高まり、実験や調べ学習の結果を、「ミライシード」*2の「オクリンク」*3を使って分かりやすくまとめていた。すると、単元テストの平均点が96点と普段よりも大幅に上昇し、学力下位層

にも大きな成果が見られた。

そうした経験から、今回の授業でも動機づけをしっかりとさせるため、意見文を書くための課題認識を十分に持たせる工夫をしている。

その1つは、「原爆ドームの保存に、賛成か反対か」と自分の立場を決めさせた上で、両者の討論を行ったことだ。「どう思うか」と漫然と問いかけるより賛否を問う方が、どの学力層の子どもも考えやすく、平和について自分事として考えられるようになる。討論では、野島先生はファシリテーターに徹し、子どもたちの発言によって話し合いを進めた。

「子どもの思考が深まり、視野が広がるよう、私が賛成・反対の理由を引き出したり、発言内容が本当に正しいのか揺さぶりをかけたりしながら、発言をつないでいきました」

同校では、「全員参加の授業」を目指し、子どもの学び合いをつくるための「コーディネート発問」を研究してきた。例えば、子どもの発言を受けて、教員が「Aさんの気持ちが分かりますか」（予想）、「本当にそれ

でよいのですか」（揺さぶり）などと発問して子どもの次の思考を促し、子どもの言葉を表出させるのだ。

授業づくりの工夫②

別の視点を与えて、
深い思考へと導く

また、子どもへの揺さぶりとして、「保存に反対の人は、戦争の悲惨さを未来の人に伝えなくていいのかな？」という発問をあえて行った。本研究のアドバイザーを務める杉森雅之指導主事は、次のように解説する。

「これは、子どもに相手意識が生まれる発問です。それまで被爆者の視点で考えていた子どもたちが、『未来の人たちにとってどうなのか』と投げかけられたことで、違う視点を持って、イメージがぐっと深まり、未来を見据えて考えられるようになっていく姿が見られました」

討論の最後には、東日本大震災でも、原爆ドームと同様に、建物の上に乗り上げた船を撤去するか、保存するかという議論があり、そこでは、

*2 「ムーブノート」「オクリンク」「ドリルパーク」などのアプリケーションで構成された、ベネッセのタブレット学習プラットフォーム。

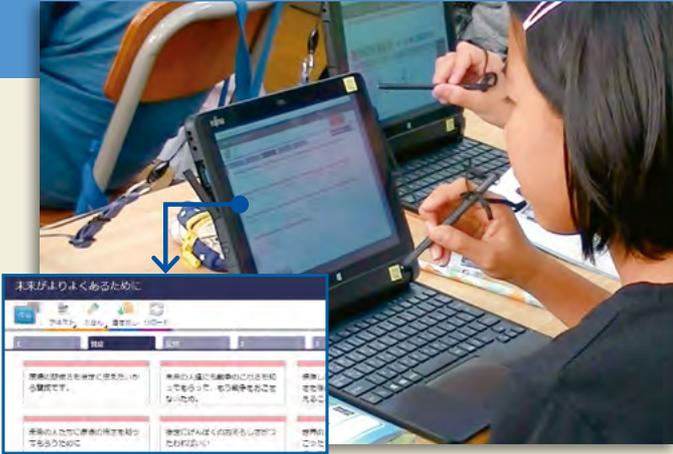
*3 ミライシードの機能の1つ。インターネットでの検索とキャプチャー機能などによって、調べ学習のまとめや発表資料の作成が楽しく簡単にできる支援ツール。

3 賛成・反対の理由を書く

▶▶▶ 15分

4 討論

▶▶▶ 25分



先生は「原爆ドームの保存に賛成か反対か、自分ならどう考えますか」と問いかね、「ムーブノート」の「賛成」または「反対」の欄に選んだ理由を書くように指示。5分後、討論を行うために、各自で様々に書き込まれた賛成・反対の理由を読むように伝え、「自分とは違う意見の人がどんなことを考えているのか、納得できる点、疑問に思う点などを考えてください」と読む視点も提示した。



討論では、先生が子どもの発言内容を復唱し、「どうしてそう思ったのかな?」「反論がある人はいるかな?」と発問。それに促されて子どもたちは次々と発言していく。両者の意見が出尽くしたところで、東日本大震災で建物の上に乗上げた船が解体、撤去されたことを話す。そして、意見文のテーマにつながることで、「科学技術、環境、人権、平和」に関するニュースを紹介した。

原爆ドームの場合とは異なり、撤去されたことを話した。

「同じような議論でも、違う結論が出されたことを伝え、別の視点を与えたいと考えました。本校の国語が専門の教員からのアドバイスを受けて、取り入れました」(野島先生)

ICT機器の活用

全員がアウトプットし、主体性や対話が促される

子どもの学び合いを促すために、ICT機器も活用した。今回は、授業冒頭で未来へのイメージ、中盤で原爆ドーム保存の賛否とその理由、まとめでどのような未来にしたいのかとその理由を「ムーブノート」に書き込ませ、全体での共有を図った。

同校では、タブレットPCを1人1台使うことができるため、全員に意見を書くことが求められ、結果、主体的な学びが促される。

『「ムーブノート」ではほかの人の書き込みが読めるので、思考が苦手な子どもが他者の書き込みからヒン

トを得て自分の意見を持ったり、さらに一步進んで自分の意見と他者の意見を比較したりと、発言をしなくても対話的な学びが行われ、『静かな思考』を促しています」(野島先生)

ICT機器はクラス全員にアウトプットの機会が得られるメリットがあると、小高美恵子校長は説明する。

「インプットだけでは真の理解にはつながらず、アウトプットしてこそ学びは定着します。限られた授業時間内にクラス全員がアウトプットする機会を設けるのにICT機器は最適だと思います。書き込みが保存でき

るので、評価にも活用できます」

ただ、ICT機器の活用には学級経営がしっかりできていることが前提になると、野島先生は語る。

「学級に規律があり、雰囲気や和やかでないと、自由に書き込めるだけに、健全な意見交流はできません。ICT機器を使うようになり、学級経営の重要性をさらに感じています。また、ICT機器だけに頼らず、子ども同士が顔を向き合わせてコミュニケーションする場面も大切です。単元の中で、目的に応じて使い分けるようにしています」

意見文の構成表 (抜粋)

<p>■テーマを選びましょう。</p> <p>①(自由な未来) おもひがけの未来をいかに実現しようか ②(そのためにできること) 自分自身で何をしようか</p>	
<p>①そこで、 高齢者がすまされる 交通手段の理由</p> <p>の資料調べました。</p>	<p>②この資料を調べようと思った理由は、 ニュースなどで高齢者が関わる 交通事故をよく見るから です。</p>
<p>③調べたことからは、 高齢者の交通事故は 歩行者の割合が49% 歩行者の交通事故は49%で 歩行者の割合が1倍多いことが わかりました。</p>	<p>歩行者の事故は横断歩道以外の 場所の横断や横断歩道での 信号無視など交通事故のほとんどが 高齢者自身による交通ルール違反に よることがわかりました。</p>

構成表によって思考の「型」を提示することで、学力下位層の子どもでも考えやすくなる。一方で、空白の枠も用意し、子どもがプラスアルファで自由に書き込めるようにもしている。

*戸田第二小学校提供資料をそのまま掲載。

5 意見文のテーマを決定

▶▶▶ 20分



自分が気になるニュースや出来事を「ムーブノート」に書き込み、未来がよりよくなることに関係すると思った項目に「拍手」をつけるように指示。先生は「拍手」が多かったテーマを読み上げながら板書した。最後に、授業のまとめとして、「10年後、どんな未来になっていたらよいかと思うか」についてテーマを決めさせ、理由とともに「ムーブノート」に書かせた。

杉森指導主事が語る

実践のポイント

先生自身がアクティブ・ラーナーに

授業には、ICTの活用や揺さぶりをかける発問など、子どもの主体性や対話を促す工夫が散りばめられていました。「どのような未来にしたいか」という意見文のテーマも、最初は短い文で、最後は理由まで書くというように、子ども自身が学習の深まりを感じられるように工夫されています。

討論では、先生がファシリテーターに徹していたのも大きなポイントです。教員が適切に介入することで、子どもから多様な発言が出て、視野が広がっていきます。同校が研究を進める「コーディネート発問」の成果が表れ、クラスの実態をよくつかんでいるからこそできる授業だと感じました。

野島先生は、子どもにつけたい力をしっかり中心に据え、単元全体と授業単体を見通した上で、他教科での指導や校内研究の成果をうまく取り入れていました。先生自身がアクティブ・ラーナーとして、様々な学びを生かすことが最も重要だと感じさせる授業でした。

成果

全員が論理的な意見文を書き、 苦手意識がなくなる

今回の授業の最後に各自が意見文のテーマを決める際には、平和に偏らず、科学技術、環境、人権などの幅広いテーマが選ばれていた。このことに野島先生は、「視野の広がり

見られました」と手応えを語る。

その後の授業では、「オクリンク」を使って、意見の根拠や想定される反対意見への反論などを調べて構成表(図)を作成し、それを基に原稿用紙2~3枚の意見文を書いた。構成表は、「目指す未来」「そのためにできること」「調べること」など、意見文の構成に沿っているため、どの

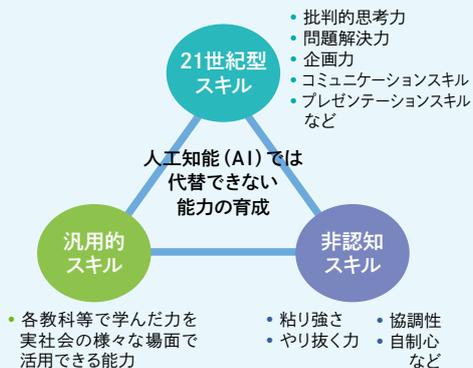
学力層の子どもも論理的な意見文を書けていたと、野島先生は話す。

「本単元の学習を通じて書くことへの苦手意識が薄らいだようで、その後の授業でも、どの子も意欲的に書くようになりました。単元導入で課題意識を十分に高め、考えが広がり深まるような発問をすることをこれからも大切にしたいと思います」

戸田市教育委員会の施策

教科指導でALを行うための ルーブリックを作成

とだっ子に身につけさせたい能力



*戸田市教育委員会提供資料を基に編集部で作成。

戸田市では、2016年度から2年間、文部科学省「教科等の本質的な学びを踏まえたアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究」の指定を受け、「育てたい資質・能力」「指導用」「児童生徒自己評価用」から成る戸田市版「アクティブ・ラーニング ルーブリック」の開発を、2017年度完成を目標に進めています。戸田市が育みたい3つのスキル(左図)の中でも批判的思考力に焦点化して、現在ルーブリック作成を進めています。

そのため、拠点校(小学校5校、中学校2校)に各1名の研究員を配置し、教育委員会、ベネッセとの三者で協働しながら、1つの単元・授業をより深めていく方法で研究を進めています。ポイントは、特別な研究授業ではなく、「普通の授業をいかによいものにするか」。研究を通して研究員の先生方の指導力が高まり、そこを起点にして、各校内に広めてもらうことを期待しています。



教育政策室長

渡部 剛士

わたなべ たけし

2007年、文部科学省に入省し、生徒指導や高校無償化等を担当。学校現場での勤務経験等を経て、2016年度から戸田市に転出、現職。



教育政策室政策担当主幹、主任指導主事

川和田 亨

かわわだ ひろあき

小学校教諭、教頭等を経て現職。専門は算数・数学教育。

*プロフィールは2017年3月時点のものです。